

福島県楢葉地区の越冬白鳥の生活様式(2008年月, 3月)

柿澤亮三

〒319-0123 茨城県小美玉市羽島2718-28

1. はじめに

福島県の浜通り地方に位置する双葉郡楢葉町上繁岡の大堤(農業用水池), その北方約3.3kmの富岡町毛萱のもみじ川河口, 大堤の南方約5kmの楢葉町木戸川河口の3地点は, 白鳥の越冬地として知られている. 大堤の池辺には白鳥観察舎があり, 朝夕の定時刻に古米を主体とした給餌がなされており, 町を挙げて白鳥保護に取り組んでいる(写真1). もみじ川河口毛萱橋附近の渡来地(写真2)でも, 朝夕2回の古米を主体とした給餌がなされている. 一方, 木戸川河口附近の渡来地(写真3)では, 不定期な給餌が行われている. これら比較的近距离の渡来地の白鳥を便宜的に“楢葉地区の白鳥”と, 筆者はとらえている.

この楢葉地区の3地点の渡来地同志では, メンバーの交換があるのでであろうと予測したので, 大堤を中心に朝の埒からの飛び立ち(埒出)と夕方の埒入りの個体数を記録し, この地区の越冬後期の白鳥の越冬生活のパターンを明らかにしようと試みるため, 2008年2月と3月に調査を行った.

2. 調査結果

(1) 大堤の白鳥の朝の飛び立ちと埒入り

大堤における白鳥の朝の飛び立ちを調べるため, 2月16日午前5時30分~9時30分に観察を行った. 5時30分にはまだ真暗であったが, 6時には大分明るくなり, コハクチョウが目覚まして, 水面を移動し始めた. 以下時間をおって白鳥の動きを記す.

6時11分, コハクチョウが飛び立つための風を探し始める.

同19分, 7羽が飛び立つ.

以後10分ごとの飛び立ち数と, 一度は飛び立ったが再び降りる数を以下に記すと.

6時21分~30分, 飛び立ち32羽, 飛び入り1羽.

同31~40分, 飛び立ち93羽, 飛び入り2羽.

同41分~50分, 飛び立ち48羽, 飛び入り5羽.



写真1. 上繁岡大堤白鳥渡来地. 2008年1月18日撮影.



写真2. もみじ川河口毛萱橋附近的白鳥渡来地. 2008年1月18日撮影.

同51分～07時, 飛び立ち41羽, 飛び入り4羽.
7時01分～10分, 飛び立ち22羽, 飛び入り4羽.

であった. したがって6時19分～7時10分に大堤から飛び立った白鳥は全てコハクチョウで, 計243羽であった. そのうち再び池に戻ったものは計16羽であったので, この朝, 大堤から出て行ったコハクチョウは227羽であった. これからしばらくの間は, 白鳥の出入りはなく, 8時半頃に給餌が行われた.

8時55分にオオハクチョウの一家族6(幼鳥4)羽が大堤から飛び立った.

9時08分に白鳥のカウントを行ったが, オオハクチョウ104(幼鳥6)羽であった. 幼鳥6羽は, 幼鳥がそれぞれ3, 2, 1羽の3家族であった. 大堤に残ったコハクチョウは115(幼鳥5)羽で, 5羽の幼鳥は幼鳥4羽と1羽の2家族であった. 幼鳥4羽の家族の雄親は, アメリカコハクチョウであった. また, コハクチョウ115羽のうちには2羽の傷病鳥が含まれる. これらの羽数を整理すると, 早朝, 大堤で峙をとっていた白鳥は, コハクチョウ342羽, オオハクチョウ110羽(うち幼鳥10羽)の合計452羽であったことが分かった.

この日, 大堤でのカウント後, 直ちにもみじ川河口に車で移動し, 10時から白鳥のカウントを行った. ここでは268羽の白鳥をカウントし, オオハクチョウが12(幼鳥4)羽, コハクチョウ256(幼鳥40)羽であった. 後述するが, もみじ川では若干の白鳥が峙をとり, 大多数の白鳥が大堤から飛来することがわかっているため, コハクチョウは大堤を飛び立った数よりも29羽多く, オオハクチョウは4羽(成鳥)多かった. 車での移動時間は約10分であり, かつ飛翔中の白鳥を見付け易い地形なので, この33羽の白鳥が観察者の移動中に飛来したとは考えにくい. もみじ川の40羽のコハクチョウの幼鳥の内訳は, 幼鳥づれの家族が19家族で, 1家族あたりの平均幼鳥数(brood size)



写真3. 木戸川河口付近の白鳥渡来地. 2008年3月18日撮影.

は2.1羽であった。幼鳥1羽づれの家族が6家族。2羽づれが7家族。3羽づれが4家族。4羽づれが2家族であった。

大堤での夕方の白鳥の飛び帰り(埒入り)を調べるために2月15日15時40分～18時に観察を行った。17時28分に4羽のコハクチョウが飛び立ったが、同30分から40分の間に82羽が大堤に降りた。その後も白鳥の埒入りはあったが、暗くて数を明らかにできなかった。

(2) もみじ川の白鳥の出入り

もみじ川河口部での白鳥の出入りを調べるために、2月28日6時23分～8時に観察を行った。6時23分には、10羽のコハクチョウが給餌場附近の水面にいた。この10羽が、ここで埒をとったものか、あるいは大堤から飛来したものかは不明である。この朝の白鳥の飛来の様子を以下に記すと、

6時23～30分、飛び入り32羽。

同31～40分、飛び入り46羽。

同41～50分、飛び入り72羽。

同51～07時、飛び入り29羽。

7時01～54分、飛び入り23羽。

であり、この間ここから飛び立った白鳥は1羽もいなかった。8時に個体数をカウントし、212羽の白鳥を記録した。うちオオハクチョウは、6時42分に飛来した10(幼鳥4)羽のみであり、コハクチョウが202羽であった。

もみじ川河口部での夕方の白鳥の出入りを2月28日の午後に観察した。212羽の白鳥がいたが、17時42～50分に61羽が飛び立ち、同じ51分～18時1分に95羽が飛び立った。まだ56羽が川面に残っていたが、暗くなったので調査を終えた。この日の朝のカウントと夕方のカウントは同数であった。日中の観察を行わなかったが、この場所での日中の白鳥の出入りは少ないことを示しているものと考えられた。

(3) 木戸川の白鳥の出入り

木戸川河口部渡来地での朝の白鳥の動きを調べるために、3月1日5時30分～7時に観察を行った。5時30分には、152羽の白鳥が互いに離れた3群となって埒をとっていた。オオハクチョウが22(幼鳥5)羽、コハクチョウ130(幼鳥32)羽であった。7時までの観察で、白鳥たちは河川内での移動はみられたが、白鳥の出入りは全くなかった。

2月28日13時～16時42分に白鳥の夕方の出入りを観察した。14時50分の個体数のカウントでは、コハクチョウ95(幼鳥1)羽、オオハクチョウ5羽(成鳥)の100羽を記録した。15時～16時に56羽が川面に降りたが、15羽が飛び立った。16時1分～42分には、35羽が飛び立ったが、降りたものは1羽もいなかった。16時55分には河口部よりも4km程上流の木戸川に35羽のコハクチョウが採餌しているのを観察した。

3. まとめ

(1) 榊葉地区の越冬個体数

榊葉地区の3か所の白鳥渡来地、大堤、もみじ川河口、木戸川河口で越冬する白鳥

表1. 樞葉地区の越冬は白鳥の個体数(2008年2月16日, 午前9時~10時40分).

場所	白鳥類	コハクチョウ	オオハクチョウ
大堤	219 (11)	115 (5)	104 (6)
もみじ川	216 (44)	204 (40)	12 (4)
木戸川	86 (17)	60 (9)	24 (8)
総計	521 (72)*	379 (54)	140 (18)

()の数値は幼鳥数,

*木戸川ではコブハクチョウ2羽を記録したため総数に加えた.

の, 越冬後期の2月16日の個体数を表1に示した. この時には520羽前後の白鳥類を記録した. この日は珍しく, 2羽のコブハクチョウを木戸川河口で記録した. 樞葉地区の白鳥の個体数は, 時刻により場所ごとの個体数の増減が著しいので, 何時カウントしたデータなのか注意を払うことが必要である.

(2) 大堤ともみじ川の白鳥の生活パターン

この地区の白鳥が埒としているのは, 主に大堤であった. 大堤で埒をとった白鳥のうち, 特にコハクチョウは早朝に大堤を飛び立ち, 約3.3km離れたもみじ川河口部に移動するものが多い. もみじ川の白鳥は, 大部分は夕方飛び立ち, 大堤に戻って埒をとる. しかし時期によって個体数は異なるが, もみじ川で埒をとるものもある. 例えば, 2月16日の朝, 大堤を227羽飛び立ったが, もみじ川の個体数は256羽である, 29羽のコハクチョウがもみじ川で埒をとったものと考えられるからである.

大堤からもみじ川へ移動するのは主にコハクチョウで, オオハクチョウは終日, 大堤に止まる傾向を示した(表1). オオハクチョウが大堤に執着する理由は, 二つ考えられる. 一つは(これが主な理由と考えられるが), 大堤では古米による給餌と頻繁に訪れる見学者による給餌で, 充分な量の採餌が可能なことである. もう一つの理由は, 写真2より明らかのように, もみじ川の毛萱附近は川幅が狭く, また川の流量が少ないため水深が浅く, オオハクチョウにとって着水, 離陸に危険を伴うためではないかと考えられるからである.

(3) 木戸川河口の越冬白鳥

木戸川河口部渡来地で埒をとる白鳥の個体数は不安定であり, また出入りも複雑で, なかなか捕え処が難しい. 白鳥の出入りが比較的多いということは, 大堤との行き来が多いものとも考えられるが, 今回の調査では両地点の関連については, はっきり示すことができなかった. しかし, 木戸川河口を夕方飛び立った白鳥の飛行を, 双眼鏡でずっと追跡したところでは, 明らかに大堤の方向に行き, 降下したことを何度か観察している.

この渡来地の個体数の不安定なことと, 人為的な給餌の不規則なことには, 関連があるように思われるが, 確かな左証を示すだけのデータを持っていない. 木戸川は, 秋にはサケが遡上するほどの大きな川なので, 写真3のように水量も多く, 川幅も広くて, 自然の餌が豊かであろうと予測される. 自然からの餌の供給量の多さも, 木戸川渡来地を特徴づけるものであろう.